

特36

66

延命十句觀音經靈驗記
上

019367-001-5

特36-66

延命十句觀音經靈驗記

白隱／著

上

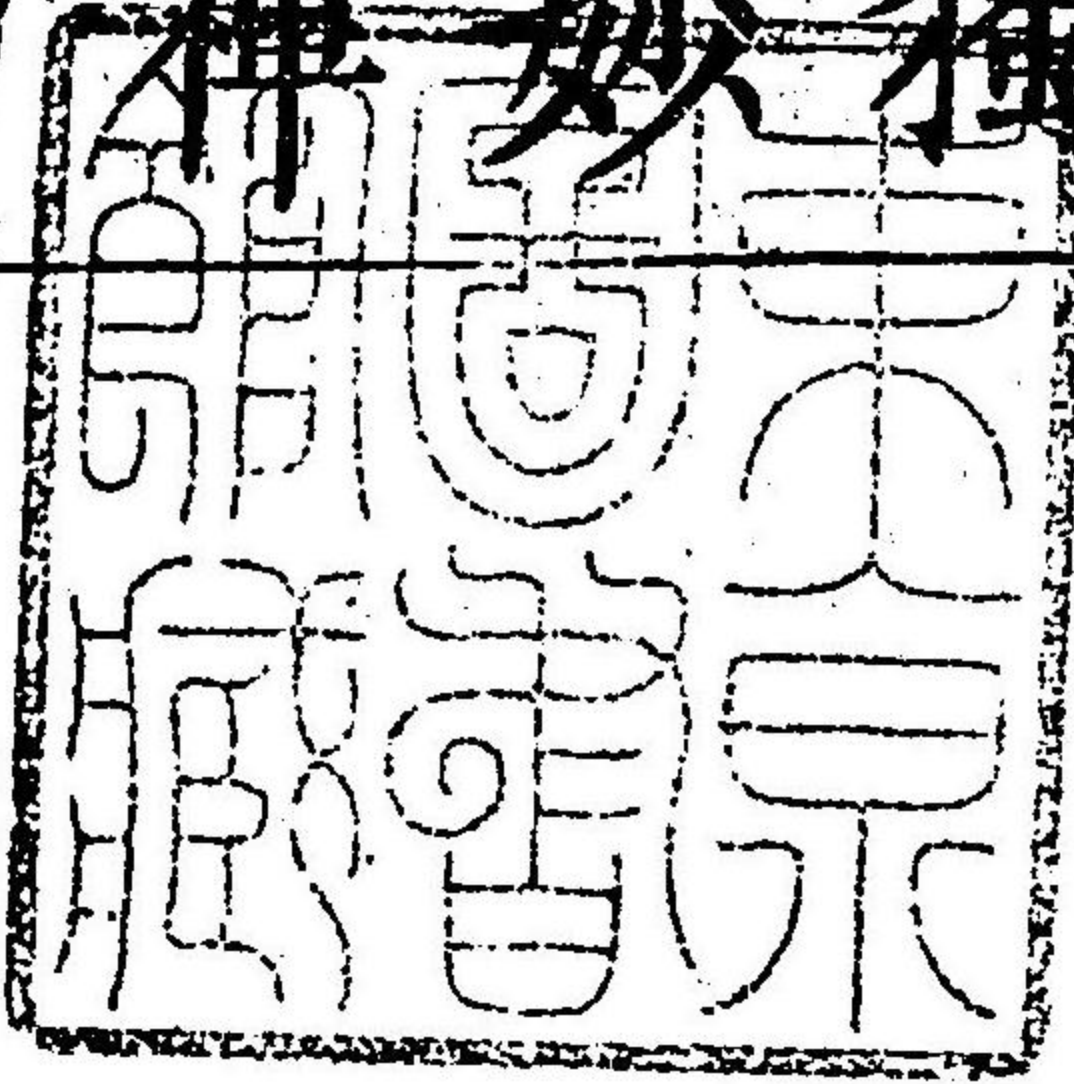
M28.12

ABG-0058



特 36
66

白隱獨妙禪師像



白隱禪師

延命十句觀音經靈驗記

希有菴藏版

延命十句經

觀世音

南無佛

與佛有因

與佛有緣

佛法僧緣

朝念觀世音

念念從心起

常樂我淨

暮念觀世音

念念不離心



念十句經靈驗記或別する供と

をる信をばる心曆の以持説也後と際

廣く廻るをてして生れ者十句經をた

文せしめぬしに中我無縁とけふ

念十句經をて自ら信するの心ある

念十句經をて自ら信するの心ある

清く是より多きもの佐程も其の宗推なる
とありてありしは其祥もあへて其に
已振持も其儘のなる男も其志願して
再び祥の上す人まかりしは其祥に際
と後も其の宗推なる其の宗推なる
類しとありて振持も其の宗推なる

書封を撰索するも一節も其の宗推なる
其の宗推なる其の宗推なる其の宗推なる
其の宗推なる其の宗推なる其の宗推なる
其の宗推なる其の宗推なる其の宗推なる
其の宗推なる其の宗推なる其の宗推なる
其の宗推なる其の宗推なる其の宗推なる

先哲は死の地を履きしむるを世に弘
めり其を朽木を染するの如く其末
を記し置くるを也

明治廿九年十一月 菊之庵と海鏡

八重澤卷之二

附より延命十句經靈驗記

九州何某候の殿下

近侍の左右小賜_り一法結

殿下は均命_いお供を_いる_いる_い推_い系_い波_いの_い系

諸君の御_い持_い不_い依_いて_いる_い分_い心_い極_いの_い由_い馳_い走_いを_い後

の_い怡_い悦_いこ_いれ_いる_いす_いと_いね_いい_い神_い交_い南_い時_い善_い舞_いの_い跡_いに_いた

い_いと_い延_い後_いと_い熱_い徳_い老_い松_い古_い栢_い影_い澄_い潭_い不_い映_いど_いる_い不

千秋のお_い年_い光_いり_い成_い後_いし_い使_い養_い寺_い名_い虎_い豹_い列_いり_い睡_い



て、亦く百歩の威を還ちりも林檎の奇親
 堂宇の夏寔にゆく目を發したる事どもに
 き倍壯年の比より諸國を遍歴し而して名益
 大利豪家多人乃居所をも於後汝のいども
 寔に比類もなれた莊親其又叔代は未終母
 衰減形く無常業せよせたまふよりいさむ是の
 そ此先也何なる積善累徳の人の所後汝
 少く汝らせ給ふやんと感入由事よけ上
 行く陰徳行を精修せよせたまふ蘭孫蕙子

よ、亦世を經て衰減しれなき所の必要分一
 なるごとく亦人悟るれあつたぐくは大凡列玉の
 諸侯乃濟徳行又乃事節儉を由るを經ひ
 系民を憐愍し賦税を輕くし國家と安接
 ありまふより外是ありへるは夏殷周の三代
 よるに歛刻削の王侯の王家成亡は其身と
 失ひあひたるハ教も限も無き事とともあり
 安きに居て危き成あらざるハ君子の人あり
 と、本文も傳るが、小月以の博學大才ハ透と

亦すておろせむい一文不知の朴実^{くろくじつ}の尼入^{にぢのい}
 道の心ふなりせむい朝夕佛神をも信仰^{しんじやう}
 せむい武運^{ぶうん}長久は子孫繁栄を内^{うち}行^いて
 たら成い古来より智^ち温^ん高^{かう}明^{めい}文武兼^{けん}備^びせ
 たまふ名大将八幡太郎義家坂上の田村丸
 源^{みなもと}倉^{くら}の右幕^{みぎまくら}下頼朝北条は康時熊谷次郎
 直実^{ちかみ}主馬^{しゅま}の判官^{はんくわん}盛久楠玄清^{すけひさののぶ}成^{なり}悪^{あく}七玄清
 景清も非名ある諸大御時頼時宗父子はる
 いづとも信佛法神を信どせたまふその外

古来無智^{むち}昏^{くろ}愚^ぐ乃暗君^{あんきん}短才^{たんさい}劣智^{りやくち}の愚将^{ぐしやう}も
 富^{とみ}貴^き不^ふ修^{しゆ}王^{わう}武^ぶ備^びを情^{じやう}んで天^{てん}理^りを恐^{おそ}まは
 佛^{ぶつ}神^{しん}を信^{しん}せば民^{たみ}を貪^{あまね}り必^{かならず}家^けを去^さり武^ぶ運^{うん}
 一^{ひと}世^よふ毒^{どく}果^{くわ}て終^{はつ}身^み終^{はつ}りを令^{しやう}ふするをせぬず
 漢^{かん}土^とありハ殷^{いん}の紂^{しゆう}王^{わう}夏^かの桀^{けつ}王^{わう}幽^{ゆう}王^{わう}厲^{れい}王^{わう}紂^{しゆう}乃
 始^し皇^{かう}も亦^{また}初^{はつ}ありハ平^{へい}相^{しやう}承^{じやう}入^{にやう}道^{だう}清^{せい}盛^{せい}はう治^ちの悪^{あく}
 右^{みぎ}大臣^{だいじん}信^{しん}頼^{らい}務^む彩^{さい}をさへおらぬの人は終^{はつ}り不^ふ
 自^{みづか}り^らる^る火^ひかて梵^{ぼん}釈^{しやく}諸^{しよ}天^{てん}ありしを^を知^しらば全^{ぜん}く
 仁^{にん}慈^じ忠^{しゆう}恕^{じよ}の心^{こころ}なり天^{てん}運^{うん}も^もず^ずいてい^い川^{がは}を^をり^り

せんや天神地祇是を罪せ給ふといつとり侍人
 や寧ろ恐るべし情を記ハ天理なり古にお云く
 戦競くまうて深き淵に溺れ給ふもく為る氷を
 踏がぶくくハ君子安きに居て危きことを志し給ふ
 乃んかり是故年明の夜もくらなく比家に
 金昆羅秋葉の室号二幅書立を流鏡の
 子細ハ一眺るる品上りの刻殿園の經營園林乃
 奇觀定よ以て當時の富貴を重むる至極此
 内事不見清きより此上控くは武室も古久ホ

ハ子孫も無業せざるを玉へりと陰祈りカ
 けりお寸志より存ドまざる退任よ徳ドて
 書画掛もの等はおひハ衆人々お操が養鷹
 精昌が花韓漢が馬裁等が半等教百地掛
 かなぶたりとも唯習時凡眼を悦むしらのみ
 利をすく明君吏金昆羅秋葉の号号の如
 といハ表具被させ上段の床の間お掛並時ホ
 一糸の房を扱んで合掌低頭せざるお討ハ
 火難盜難七難即滅七福即生武運を助

夢のいし夢の命も長きに此夢中ハサふ及ぶに
 天下泰平此尚家此代もくくの行も乃あふ
 是ふさるる大善妙ハこれある南ぐ北へ侍り
 迎の内事と存じ延命十句観音經と中と廿枚
 お供を侍り侍り世經の靈験を傳ぐ身は上
 れてもんもあふ及ぶ有難き事ども教あ
 だびられあま別る金毘羅秋葉社の神あふ
 おつひに扱ふさる此經ハ亦たも實文榮卯
 の以るとよ人王百十三代靈元院法王様院宮

有て比叡山靈空律師命ぶいりも切法深
 かりず經を撰び出上流も傳はしと法勅
 使有る靈空より深く大慈入て精く
 乃撰てけ經を撰ひ書して以てを然す
 即今の延命十句經これなり此の法之系
 所家の何某が妻難治の事伝ふかつて百葉
 終始しそ終末甚くを悲しと悲ひて毎夜
 小野の祓前示丑の時法と救を傳ふ七百遍
 くる夜神あふ浦經抄と法樂を響け御く

祚あを辭し外ゲ面めん橙ちやう暗あんく水すい菜さいを一いち卦くわい爻ぎやう
 菜さいの火かわのううりりまゆまゆままああんんれれどど老らう傷けう一いち人にん獲とく
 ううけけふふああままままののああるるををアアんんてていいままくく吾わが子こハ
 胡こ為をの人にんぞぞやや近ちか以を毎まい衣い祚そああふふ詣よずず志しはは何なに
 乃な求もとるる所ところありありややととままははぶぶささぬぬまま妻さいのの病びやう難なんぬぬ
 ししをを汚よごるるをを信しんぜぜばばししくく指さしをを打うちちハハ卦くわいすすまましし
 志しをを額ひたいをを摸もめてめて嘆なげぶぶとと云いくく已い卦くわい實じつ不ふ是し必かなら死しの
 重おもきき病びやうなりなり癩らいひひ扁へん倉そうがが輩はい秘ひ術じゆつををささすすとと子こも
 滅めつ灸しう菜さいののこころろををいいまま中ちゆうにに救きうひひららるるもも能あたりり

茲こゝハハ一いち件けんのの一いち大だい事じ義ぎ何なにりり今いま任まかせせ授まかせせんん謹まことで
 紀き交こう一いち均くんてて一いち家けををくく病びやう人にんをを丸まる圍いんんてていい給たまははす
 續つづ補ほせせもも今いまめめのの方かた病びやうひひかかああるるにに全ぜん使しせせんんま
 即すなはちち善ぜん作さく礼らいししてて頂ちやう交こうをを續つづくく二に三さん十じゆう遍べんふ
 ししてて終しゆうふふ補ほすすふふとといいてて礼らい解かいてて辭ことししとと即
 今いま姑なほ延のび命めい經けいかりかり均くんりりままのの家け不ふ到たうはは六ろく人にん家け
 六ろく七しち紫むら病びやう人にんをを並ならびびかかららんんでで言いふふ知しららずず補ほすす
 熟じやくくくままけけむむ先せん不ふ傳でん交こうししままるる所ところのの延のび命めい十じゆう句
 徑けいかりかり史し怪けとと問とてて云いくくまま經けいハハ何なに國こく也やアアなる

所より傳ふてあり何人うありまへるやうん
 不思候さまとるふしむさればはけ曉さても
 けだうきさを傳一人何國もおく出現せさせ
 候ふまは母仰ありたるはけ病人ハ候ひて下れ
 名醫哉集め肝膽を碎き秘術をそへたり
 とも本葉神根を以てハ中へ使事とゆる幸
 何へだ候ひいり候る強者を衆んで大法秘法を
 行どたりとも中へ下力とてハ必死と助け
 救ひうる幸候り我ふまは激怒最上正極の

金又りの家内おありけ病人をみかろんで
 変ふくけ秘文を信心を凝らし唱へたるほく
 今明乃るふ希代の靈驗ハ人づきとて二三
 十返回音小鼓ハおひとてまておふりたり
 とも人々お母やうたるが誦るもなかりあり
 さいぬ丈の云くは年のころハいりや成るや
 淨白の面ハいりや袈裟袈衣の色と返一なり
 母終もかた小野よて又兼をたるはせ傳ふ
 かしも遠ハざりたれむとぬく教教一子と合を

有がや貴くやな是ハ小聖の心神の我々
 信心深く此経續誦さへしうんそ此方とある
 小分とせ給ひ此経傳授一たまふなるめりい
 よ南んそて信び常んで續誦一なるがも
 たり食事もすみは身小令使志よりなる
 誠おまこゆき靈強あらずやは経も陀羅尼も
 名号も加持も呪もまじらぬ事もは
 したるもた文なりすや終るふけに経世の人
 信く悟む者多し大凡五時八教の同くハ

華嚴部阿含部大方等般若法華部五子
 部中八卷の中何とて跋陀のさかても終工一
 き出所なりいさふらねハかすは偽經あるそ
 眉を離し人有り何ものもせよ其の
 智の穿鑿なり你志とぞやけ經ハ漢とめてハ
 親を大士は作の形をねどあひ孫毅徳と云
 一若ふにけり授けむい我物もハ小野の
 心神一く此門の形をねど面のけり授け
 るハ豈疑らめあるべしや熟く考る小彼心神

一四聖卷一

仰律も肉秘ハ即善薩新中地十一面觀世
 大士の内化身なるよ一幡龜鶴とつら双紙の
 面小分明なり仍もせよまもせよかくばり
 靈驗ましくて世上伐利を志まふうくと迦松
 門左が作もせよ正通邪が認もせよ汝分信
 仰中を教不續鋪一け内經の利益示よつくと在
 家ハ家業無常一火經盜難水難等を避
 系事一同出度浮世を渡くもよもなれ吉兆な
 らど中出家ハ身以信心堅固大道の測源み

徹一帯に勤めて大法施を好一大善提を成
 然せんも皆此經の切法なりす也武士ハ空寂
 小忠勤を励ま一武術と精練するも片時を
 文小問巧なく勤めて竊小け經文と秘誦一
 武軍武中言ハ難言哉増一君を堯舜の君不
 一民を堯舜の民中一子孫ハ身不無業一
 王位を守護一美民と安撫一内商家族代長
 久系業一とせりとも是ふとる大忠言ハあま
 かしらとくハ彼人多多黃齒其心多砂仁等の如

大妙業の由所なりくは自由の如くなりけり
 しきし是は擲し可なり人なり只彼功徳の
 難治のまゝ病を治一人の病苦と救ふを以て
 貴しとすくのものなるも是の由を尋ねて
 自由を問ふに時阿く人や佛祖統紀第九曰
 東魏宣明の孫教徳は世大士を皈依す
 賊のあふ計らひて罪を坐せしる刑を施人
 切ふは經を志人忘す刀を折るはも傷
 ず三皮刀とかゆれども三刀とも折る有司

言勅といへる者ふ以て終ふ死とまぬる
 教徳あふ傳まば事ある所の大士の像の頂之刀
 の痕有けりといへ通載第九曰し一高欽相
 抄ふ者て郡主たり一人あり姓ハ孫名ハ教徳室
 義をまじむる官より法を犯して囚禁せしむ獄中
 あり明の誅せしむんとする夜ふん不経夜ら誓
 門品と誦す信りて爰中に告て云く你此經を
 誦するとも死を免る事能りて形くへ高王親
 音經を誦する事一千返せしむ尚に刑戮と多る

る一教誨が曰今獄中不あり言王經を求る
事成は終一偈の曰我且くく你小口づて授与
せんと言て二三返に授与とくハ愛免忠記
持して一字をも失せば心不誦念して九百返
とゆらう時帝心りゆきハ既不屠所不引出と
誅教せんとい教誨務怖して使人小回ていとく
屠所ハ何きのあぞ進進を何使人の曰何なり
是哉問ふや教誨が曰く今言中一偈を延
命十句經を授与して云く教ハ一返と誦せむ

必ず命死を免る事成はんと今者一返を
久く教ハ使人心して後く約途申急ふ途
て進びゆく漸く一千返を満つ土壇ふのがゆ
誅と交るに到て身切も授せむと刀打て三返と
かり王教誨をば進回ひむく汝何の幻術あり
教誨が云く突ハ幻術なり獄中におめて死を恐
むと云教ハ謹で善門品を誦す者申ふ一
偈を授て言王十句經を持誦せむと一返
誦を免る事成のぞと王の云く亦ハ捨る

こゝに聲と何ぞ異ならずん法官を召て言て云く
 更ふ死ぶ者何れも各人命誦するごとく一千返世
 むべしと例不憚りて誅むる者ぞ引おしききと
 斬ふ其人と皆悉く教誨がごとく命死を遁る
 事おおて王國中お勅して人民悉く誦する
 事一千返せむ是より西中安泰ふして刀
 兵の多ひなく疾厄なく火難盜難疫癘なく
 穰穰に年以豊饒ありて其国人民上下安泰
 と人まふして昔年を樂と舞りと送りける

ように宣ふ目出及お語るる事や斯る事は安泰
 山き内徑文のよした天下泰平万民豊樂
 所尚家代長人の所祈禱のためふこねふ
 ことなる大長幼ハ是の如くも見請ふは言飲
 國王の宣下せしむるは家中の事おはた中ハ
 尸不及を以京も田舎も同楽軍死教習留合
 浦の果すでもや功男女諸事に續誦の教よ取
 するハカクも先ハ大畧一万返返づの所福者て
 續誦とせまく欲しき事よ佛祖統紀三十七

法運通塞志矛云云く晋の元興二十七年
 王玄謨北征して律を失ひ主將蕭斌あはれを
 殺んと欲すを獲れず縲せしむんとす。蘇の夜爰ふ
 人為告て云く你け及の災厄必死道是かて
 此小深遠秘教の金文有り稱して延命十句經
 と云你若此經を誦して一千返を充むれば
 必死を免るるなりと即口づつて授けていとく觀世
 音南無佛と仏あり同と仏あり縁有り云々是來
 るふは十二字此金文一字も失はば丹悃と抽

して瞳小徹して是哉誦すも夜沈きま子なる
 者若中少親世大士影のしくみ枕本よお現
 せよとむい風ふ起り行く蕭斌より一苦練
 ちて去る漢が十死を救へちるば即君臣ともに
 上もかりた徳りたるべし友もたかく妾りふ殊戮
 せば君臣とも小けりさる大災厄かゝるづきと
 有しとい告者くバ沈きま子大母終りに蕭斌小
 對一具小けり我は清る蕭斌もまへ發つとと拍
 ちて去くるも又々有るもつた者中の内告とせり

たりとて身およわりめて形なるほごふく一とび
 志て終ふ事なれなくとて剝とをれば首
 され疔とやとる程おの殺珠など掛とる如く
 首の前後と圍と並ぶ出来てそれ者痛ま
 かも又のぶとびに死一生のこたぐり
 或者のそく世及請少毎で当世何事のちめて
 淡法せとせもふハ宙時を及の大渾なるより何
 卒け初者おりて救いと請んハいふてけよたて
 二終者ども一お事なまてかの始末を濟り和尙

大慈大悲よくハ助け救ひむてらふ事ハ例の
 延命十句經を授く事おのてお法が親屬及
 見は睦一かりたる終は招捕とらけりたる大醫
 の心女子ども並ぶつたり病人とがみ坐して
 坐敷小坐と瀆涌一たるふるごお終ふ一ある
 と終て或相象の相着申おまてお終ふ出で
 有がごお婿やなけ程人におまありのこま
 金文をさ終お意らげ習しむり一切はふより
 我が中より終てそはたる終を返の終

一〇〇 HAWAII

業皆そく滅して我ハ今ハけ所を立のん
 乃生天で上より大善果を授け永く善法
 に熟くなり希あるは供養四十二字は金文に
 ろ計らんゆゑあまの法は人よ人も程励
 こをんで世涉経をを教ふ讀誦しむひてん
 ち則七難即滅来世ハ必無き劫来生死乃重
 罪滅しては身小善上善の徳を成就しむるこ
 ぞかし今ハ是をたふさずやとてかきけし
 一がふさやおぼが上と件人の徳おも病悩も拭

ひえたるこへ平念くはでおぼへち愛のそ
 たる心也して嫉妬のりまりたりの弾けん
 音起も曲調もしふのりもたりのしんそ
 と誦ぎ道きとるたず教を踊躍しと踏舞と
 志るおぼハ書の大勢の珍は弟子ども二三指人
 とりかへしやふおぼお具を法中一を信が
 芥小列を解てれ謝とのて念現来て種も
 せしむ告と世経の靈路もまの敷法あること
 讃嘆一且位と信ぶ是実不實也弟と庚午の

ちとく急後ちくは来りり定にまよる針灸
 茶のこの力めて平愈し難き難治の大病と終
 小四十二字の秘傳の述べて後よ七日が申ふち
 平愈せしと毫小世間深き希ある大法候と
 云ん中はえ文の初の段とよ志城下ふ大橋
 の東に當て大舟の家申の屋敷にり其屋敷の
 桑のるある女申のうち小を習いける娘の十五
 六歳なるが言は他も幾一人物も情もせふ並び
 なき有るりま人も又なきものふあひるあ

貴おしはうらばくふいつら供とりたる者
 里介と云く小別とあり婦女家や傍撃のこが
 かり口ふりきりしてあかも主人の母も使
 かり主人ハ大とみ情も瞋つとあつたのうらふ
 引とくせ大の眼をむらひてとてあつた
 武士の家ふ有たがうら語及初のけとあ
 今ハとれまぞそ受悟せよとてあびくろひー大
 太刀とくけりけ後へあつて流ふかうとく人く
 たるあふ七旬小をれを母のけりやとせ付もせ

一命經卷上

十

来て大音にげ先待て你ハ狂する癡するうふ
 八月の十七日 神君の命自ふらざるや當時天
 下は武士たらんずものさ此果爾當てかるたやと
 初ドたん其改易う追放り必安穩小身とまら
 幸能いどたや半ハあててあてあてのまきもせよ
 やたあくハ你七生を此劫當なるそとて便を
 流てまされるは彼武士乃とていて曰く此
 うハ是非了うか付是ゆるをハき一おくぞん
 ぞしてゆ後かるる久く追入水風呂のころうあせ

家来ふと付上段下段のらは此等と十事かど
 積かきあてつこの食のハ水ぬきの穴よりあけ
 与よ又十事の事には扱ても付る者あは明り
 必同罪あり付てぞとてきりうふおめたさうんで
 きうぬらひしきりせうらき毎ハもそふ小座
 世とらつ湯屋へせび入らぬあめこの穴より
 さのぞれて汝の命ハと首限りたるぞりし今ハ
 と名十死せん方とせかるれ去あがけ上も万一
 命取りたくハけ上ハあててて件の延命十句

経をいづら授けむし小を好むも同じくよきよ
 そこそ人一人小讀進なるが里今もいつくよしく
 讀んでおとせおしめて同じく讀む時老母のよき
 小里今小愛へむつくよも此經のむし徳十き情
 景傳り宰金と破つて出たるも此經の威徳也
 主法主馬判友盛之も読ふおこと成て謙念系
 有し時改再誦發せざるこ前のおよすまら
 此經を讀誦すおむる誦せざるふ南川で太刀丸
 のおつけたりたり太刀鐙中より折、彼言實

が如く二刀中く此留たるも小皆そく折くり事
 走バ死罪を言えし命と脚りたりる福不誦也
 盛久ハ愛此是るあちあくと今の世も誦ふ
 そか、折くハるより出る息今息を一生のるそ
 く此経となりゆるぞくと大抄經をよきて此分
 信心小讀つてせたるき一必る思候乃重誦
 有て命ハ助るるたうそて小登世法も立ゆる
 是より里今ハ丹誠を凝し經表讀誦しるる
 ふまやととせし山とあも成らんよむいなる付

湯殿の中へ人音一々して水ぬきの穴よりさし
 のぞいたんたる小穴へあつたの大山伏面を赤き
 して目の中へ人小指をたぐるを同く指のうら
 亥早行つておのほるを油のまじりて命ハ
 有るがまじりておのほるの穴より身を指せしむ
 一助けあさすしてさし結けたる里分はうらも
 手越へかえんと百端をさしめさしめけども
 絶ふ一寸の穴の穴をたぐるをさしおすを
 指ぞあさし山伏らつておのほるをさしめさしめ

さへ入る里分は袖首はうらんであひつてお
 きり分は首も又絆も激き不辨けて絶へり
 死するまじりたる事もたや一府もあまのうらんとお
 たるをたぐるをさしめさしめに腰より下指つたのうら
 絆の外へおのほるを成るれど里分は氣息をほが
 眼をさしめさしめさしめさしめさしめさしめさしめ
 一尺四方斗のまじりたる箱の中へあつたさかぐらう
 みるみるさしめさしめさしめさしめさしめさしめ
 又後さしめさしめさしめさしめさしめさしめさしめ

能く考へんる小僧やな彼主人の至福は産
 祈の難みの水を建するある道の穴の中よあ
 是くす身と合せて彼をよみくをいりて行
 ぐれ計らども彼を貴の後ろの塚に置くあり水
 道の只へ這出たり首巾かしてをさるるあり
 の方より大橋のり橋の上よりあつてもや彼湯後の
 中にて水ぬきの穴より橋のそたよりなる大山伏
 来の人のたふけて祭文よきながうる中此は行
 と彼をいひ居るうらがかりきれの遠るうかの

水たのこふ人うげあるを足付に死あり里女
 小向く汝いりある子田まはやく怪き所いハ
 方ども里女なく身と合せて上件のみ務とて
 家山伏ゆより右の身成りのり里女が細首つ
 かんてあまやくもたなくい出りくづる者ともひく
 上よ相感らせ及び中かづくを脇加染と掛縷
 ほう貝きた揚杖修也もなき小山伏小作ま立
 大勢の人とおいひけ山伏の親方のあつと
 上件を具お語り語りまするも廿日もあつを

初てハ中へあつたふりやうなハけいひの如く
 へちまの如く清け何れも後れぬ時
 着せうといふはゆる身と務めてもはせぬ
 心をはたかすもさうしてはなほ
 是ぞ誠な彼は經の威力カヤおん
 奥川の修験のほろこいの河國梨は
 社に二三百石もえまふう上系ありた
 奥のへゆるもふりやうはなほ
 の借人を引かへ彼親方のほろこいの家くた

入つてもいふは後ハ事おつて智源が
 始末を具し給り彼ちがうたハ
 小侍にハはましるつゝをいふ
 ちよもあつたは徳の成なりと
 物語りしは河國のまゝに
 来り中へて追侍の者ども
 なる事どもあつた時
 侍者といふはさういふ
 奇なりといふは智源ハ道中

く彼経續補一くる福ふ阿闍梨も又ある者なり
 思て國々もをもおふ持てて一入憐愍せしむ
 くるは法王一人の息女なり其月かから舞一く
 人栖ふ給せくる器器自慢の人給ひ十七
 八よひのこまきよにさる人もなり一あま智源が
 容儀人ふ務まふ事 發明なる中事とんそ
 いつりのほきおひとぬりおらさず笑ひ合ひも
 進こまあるとんと母なりくる人をも憐し
 又の法印ふさを洩るは法王も大おほびもい我

もたるとハあひつれと娘がふのけり難きお歌も
 いそごひと三人伴儀一交一智源と巻きよと
 定めりむむ九死を遺るのふらさずおひげ
 おろさ知行えくぬりそそく是け徑の威徳お下
 ち後問も有く官位のある系部へ入法せきくるが
 幸い通那のた給されハその修験の親方にあふ
 立寄程く玉帛と裾り赤あねびあふ
 二十年あま大法のきりあ当のし戸内のお話ふ
 彼ま人の屋敷の町も有く假名実名おひりおく

彼山伏の教方の住家も恨みあつたが、
 の心ありて精しく書記さば、
 くりき傷宝曆并又丁亥の抄書、
 郡手越村の林精舎におわき、
 しては、
 靈地なるより故小幡素勒りて、
 叙する者り手越と後府との境、
 所ありき、
 十で果実客をこころは、
 越りて父母も又たさるる者ふん、
 一と小幡お老あふ、
 の翌日よりと風、
 といづとも百素寸、
 くたろぬと母悲嘆の余、
 抱て伏沈と悲泣して、
 子も小煙めけ子と、
 かりと抱いて、
 小幡を身神に、
 及ふ十の鐘と、

越りて父母も又たさるる者ふん、
 一と小幡お老あふ、
 の翌日よりと風、
 といづとも百素寸、
 くたろぬと母悲嘆の余、
 抱て伏沈と悲泣して、
 子も小煙めけ子と、
 かりと抱いて、
 小幡を身神に、
 及ふ十の鐘と、

に死ぬけぬ日月のまろりハかくと嘘一投の悪徳
 深坑音も如く臭もたし唯あうにおおそ何百人
 も如くもと泣さけぶ如ハ夢小肝冷く臍碎る
 だらりたるまをさふ向ふとん涙さる方百里わたる
 さも如くも猛火乃殺も涙もたなくぞともし何の
 ありけるや呻嘆大呻嘆とて八大地獄のまた初
 大熱の如るが彼より上るやのふハゆる地獄の大
 火は金物なるう一彼もさおおそ何百人もた
 ると泣さけぶ如ハ殺も涙もたなくぞともし乃

呻嘆大呻嘆の烈火は屋敷をたておちた呻
 如りあまりお悔ハあも自教百遍と
 唱たりたれも何れもたし何れもせんか
 なと教蓮のまろりハ交へたれど畏づくも
 百遍だらり唱たりたれたふのまろりも如りけ
 ば今ハもやうにまろり泣きあふ思
 候や何心何方より来るもたなく十歳げうの
 小法師の影法師のまろりたれがゆかふたうそ
 くふ十の徑とよしく袖すり合そぬりもれど

幸しあるやも時不あてハ我もをりを目小
 伏せりりりる彼寺は上上人何来ちの大和
 者そ和の内隠居をゆそくは居主のき信い
 つまのき家小亦支りそ大苦患をそ支ふはるも
 悲しく痛りりりかそお陸ハ彼内経の功力小
 や焦熱叫喚黒繩紅蓮等のこも烈そ大經
 所を何れも陸りも物くは身くよそゆそ
 くらふ函谷關とやりかた九席の關とや絲
 すとさこも高入なる城門小者ぬ門前ハ

初元鬼劣法鬼西の鬼かごのたも志し獄
 率ももるは死人よとさるよ小おいまし先
 引立く出入ハもも切とらんれが閻羅大
 城とさる全字は親の魂を縛りこそそく
 とおり畏づく彼門内をえこせはそそ
 高位貧究ト結とかとど老幼男女僕従奴
 婢を接はごま一存お返込られそ口とけ
 口説をそそ悲しやな苦しやなけり成り身乃
 果ぞやあし閻浮小車一時新しき前河

一合雜卷下

三十一

八ん口書らんとしてまひ出する大妻等なるものこそ
 況んや開闢より以来人死して後地獄若しと
 て立仰りたる人こそまろれ閻浮羅とて捨文二つ
 舞ふる若し若しをかくるをこれ人の二つをたはる徳ありて
 おしきたるものされど死すれば即魂ハ冥途よ皈
 へ魄ハ泉おゆる何ぞ死して上野お精也とて塗
 の書とて文んそれ人々んぞ若者の心掛り今今ハ
 孝行の忠の忠ある君臣父子夫婦昆弟のた
 と乱らば業お仁恕の心有て老死して休せバ君

子の人たすまくの何の佛のおむごま何は浄土の
 おふぶらうらんとおく書しあめらむどおぬお
 る事と教化もふ人あるてと今を独歩一丈
 より大お安塔のあひとたり若者の人々の六千六部
 より礼よ秩父よ坂本よ西本回心なるおと徳の
 書の一つとてとてあれとてやけとてぬ若もの
 八法即ぶおだすすすすすすすすすすすすすすすす
 やしおびとあひほがやれを勿祈りや志や小智
 ハそら能のとぬとけとハ今我らが身よあしとて

少前すくまへの邪よこしまえハ白業はくごう自得じとく人ひとよも邪よこしまえハハハ
 天あま魔まもやりのやうな破やぶ句くもやねもどきもねも
 一ひと口くち説せつも天あまふあどがし
 伏うつて歌うたも焦こもカハ目めもやうもね風かぜ情なさけ也
 お怪あやり身みも伏うつ人ひともねもあつたのハ十じゅう句く経きやう畏おそづ
 く漢かん漏ろうもねもあつたのハ一ひと人ひと漢かん来きたつて
 お怪あやりもねもあつたのハ大王だいおうの内うち前まへもねも
 大だい喜きり上げ南なん閣かく浮う抱ぶ大だいり本ほん籍せきあつたの
 お怪あやりもねもあつたのハ一ひと人ひと漢かん来きたつて
 お怪あやりもねもあつたのハ一ひと人ひと漢かん来きたつて

